

令和2年度 実践研究奨励援助事業 採用校・研究主題等一覧

■ 学校経営研究

No.	園名・学校名	園長・校長名	研究主題
認定こども園・幼稚園】			
1	萌丘幼稚園 認定こども園	佐々木 桐子	園庭における事故の防止等の改善を図ること。 保育教諭間での連携を図り、教育の質の保証と向上を図ること。
【小学校】			
2	宇都宮市立城山西小学校	市川 文人	主体的学び・協働し たくましさを育む 学校経営 ～「5つの公約」と「5つの約束」の実践を通して～
3	鹿沼市立東小学校	鈴木 康夫	一人も見逃さず、すべての児童の自尊感情育成を目指した 学校づくり ～ 大規模校におけるきめ細かな指導への挑戦 ～
4	日光市立足尾小学校	松浦 恵子	小規模校の特色ある学校づくり ～小中併設に向けての取り組みを通して～
5	下野市立石橋北小学校	坂本 美保	認め合い・励まし合い・助け合う学級を基盤とした学校づくり ～小中一貫教育の推進を通して、地域とつながり社会に 貢献できる子の育成を目指して～
6	佐野市立天明小学校	渋江 隆夫	児童一人一人にとって明日が待たれる学校 ～いじめを しない させない 見逃さないために～
【中学校】			
7	宇都宮市立晃陽中学校	加藤 悦宏	withコロナ時代における学校経営の在り方 ～持続可能な感染拡大防止策の工夫と生徒・職員の衛生 意識の変容把握から～
8	那須町立那須中央中学校	渡邊 康成	「心の教育の充実」 ～ローテーション道徳授業の実践を通して～
【高等学校】			
9	栃木県立栃木高等学校	大川 直邦	「県南の雄・栃高」 ～グランドデザインづくりによる、学校ビジョン・ミッ ション共有と学校組織の活性化～

研究主題 園庭における事故の防止等の改善を図ること
保育教諭間での連携を図り、教育の質の保証と向上を図ること

園 名 学校法人萌丘学園 萌丘幼稚園認定こども園

園長名 佐々木 桐子

1 研究目的

変化が急速で予測がつかない時代、子ども達を取り巻く環境の変化により幼稚園が抱える課題も複雑化・多様化している。今までには考えられないような場面で怪我をしたり、怪我の程度も酷くなったりしている。そのような中、幼稚園園庭における危険箇所を調査し、その結果から現状と課題を整理し、園児への対応を検討することを目的とする。

2 研究内容

①：園庭における危険箇所の調査

②：危険箇所の提示・共有

事例（うんてい 手を放して落ちてしまう）

③：危険箇所に対する対策案・保育教諭の対応
を意見交換・検討

事例（うんてい 安全のため、マットを敷く）

④：講話研修「緊急事態・応急処置への対応」
心肺蘇生や骨折をした場合の三角巾の使い方などの応急処置の体験。

園生活の中で、起こりえる事故や危険を予想し、ワークショップ形式で、予防する演習。



（KYT シミュレーションでワークショップを）

3 研究成果

園庭に設置されている遊具、一つひとつに対して、保育教諭が危険と思っている範囲にそれぞれに違いがあり、この研究で、話し合う機会を持てたことに大きな意味があった。

禁止事項を作るのではなく、必要最低限のルールを決め、そこを基本にして、年齢や発達に合わせて、臨機応変に対応することにした。園庭は広いので、お互いにコミュニケーションを取りながら、補助する場所を決める。そのためには、今まで同様に、全保育教諭が全園児を見守っていく姿勢を大切にする。

また、固定遊具の活動を見ていく中で、ぶら下がる、掴むなどの手や腕などを使う動作が苦手になっている様子があり、そのことで、より怪我を起こしやすくなっていたのではないかと思われた。そこで、意識的に体を動かし、様々な動作をする機会を増やすことにした。

4 今後の課題

認定こども園になり、乳児も一緒に園庭を利用している。遊び方はもちろんだが、動きが異なるので、時間差を作るなどの配慮も必要。また、園庭を改善することができるなら、乳児と幼児の遊びの棲み分けができるよう、場の設定をすることで、乳児と幼児とがそれぞれに互いの存在を意識しながら、活動できるようになり、学びが深まるのではと思われる。

固定遊具を利用した活動を意識的に取り入れて、記録を取ることで、子どもたちの体力面の動向を図ることができ、幼児期に必要な運動遊びを理解することができる。

学校経営研究＜02＞

研究主題 主体的に学び・協働し たくましさを育む 学校経営
～ 「5つの公約」と「5つの約束」の実践を通して ～

学校名 宇都宮市立城山西小学校

校長名 市 川 文 人

1 研究目的

本校は、全校児童105名の小規模校である。明るく上級生と下級生が兄弟のように仲よく生活している。半面、気持ちの弱さや消極的な態度の改善が課題となっている。

また、本校は、平成17年度から「小規模特認校」の指定を受け、同時に「5つの公約」(1 会話科, 2 文化人の先生方の授業, 3 地域連携, 4 安全でおいしい給食, 5 放課後スクール)を掲げ、実践を重ねながら発展を遂げてきた。

以来、16年目となる本年度は、5つの公約の推進とともに、新たに児童と共に創り上げる「5つの約束 あ(あいさつ)・い(いじめゼロ)・う(宇都宮で1番)・え(笑顔)・お(思いっきり運動・勉強)」の実践により、児童一人一人が主体的に学ぶ楽しさや協働する喜びを実感し、たくましさを育む学校づくりを目指す。

2 研究内容

(1) 「5つの公約」の推進

○ 主体的に学ぶ会話科の学習

本校では、「小規模特認校」の取組みとして特に「会話科」を教育課程に位置付けている。

会話科は「会話の楽しさやコミュニケーションの大切さに気付き、会話を通して他者と積極的に関わろうとする態度の育成」を目標とし、本年度はコロナ禍の中、3年生「読み聞かせ」、4年生「劇」、5年生「落語」、6年生「語り」の授業を展開した。発達段階に応じたカリキュラムを組み、様々な表現方法を学びながら表現力の向上を目指している。



5年生「落語」の授業

会話科で特に大切にしていることは、「相手意識」である。相手によりよく伝えるための声の大きさや強弱、表情やしぐさ等について、講師の先生を招き指導を受けながら豊かな表現力を磨いている。また、どのように表現すると効果的かを児童同士が話し合ったり見合ったりする場面を数多く設定し、アドバイスし合うなど相手を意識したやり取りを通して、コミュニケーション力を育てている。

さらに、会話科の学習の一環として、毎日15分間のショートタイム(月～木曜日)の時間

を設け、英語に慣れ親しむとともに英語を使ったコミュニケーションも大切にしている。

(2) 「5つの約束」の実践

○ 宇都宮で1番、あいさつで1番

児童主体の新たな取組みとして「宇都宮で1番」を掲げた。児童にアンケート取ったところ、あいさつで1番を目指したいという意見が多く、「宇都宮で1番」は「あいさつで1番」を目指すことになった。

特徴的な取組みは「あいさつ広げ隊」の結成である。校長主導で開始し、各クラスから自薦他薦により隊員を募った。

結成式には、18人が集い、一人一人に任命書を授与。続いて、以下、あいさつ広げ隊の活動内容を示し、実践することを誓い合った。



「任命書」授与

・合言葉「いつでも・どこでも・だれにでも・じぶんから・さわやかあいさつ」(い・ど・だ・じ・さ あいさつ)を実践すること。

・あくまでも自分が実践している姿を通してあいさつの輪を広げていき、他の児童にあいさつを強要しないこと。

隊員となった児童は、率先してさわやかなあいさつを実践した。登校時や下校時に加え日中に出会う来校者に対しても、相手の目を見て心を込めたあいさつができ、来校者からも「気持ちのいいあいさつですね。」と、お褒めの言葉をいただいた。

その後、さらに希望者を募り、隊員数は、第2期8人、第3期6人、計32人に拡大し、生き生きと「あいさつの輪」を広げている。

3 研究成果

・体験的な学びや他者との積極的な関わり、児童主体の実践を通して、児童一人一人が自分の良さを知り、自信をもって生活できるようになった。

4 今後の課題

・コロナ禍にあり、活動の制限を余儀なくされているが、「工夫して実施」を合言葉に児童主体の活動の機会を探り実施しながら、たくましさを育てていきたい。

学校経営研究＜03＞

研究主題 一人も見逃さず、すべての児童の自尊感情育成を目指した学校づくり
～大規模校におけるきめ細かな指導への挑戦～

学校名 鹿沼市立東小学校

校長名 鈴木 康 夫

1 研究目的

本校は749名の児童が在籍する大規模校であり、大きな特色は「数の力」を生かした教育活動である。しかし、中には「数の力」の流れについていくことが苦手な児童もいる。「数の力」を生かしながら、きめ細かな指導をどのように行い、児童の自尊感情を育てていくか、研究することとした。

2 研究内容

(1) 一人一人の課題の背景の把握

- ・臨床教育学に基づく児童理解
- ・自尊感情を育てるための手立ての検討
- ・スクールカウンセラー等との連携

(2) 児童の状況に応じた支援の実践

ア 第一次支援（通常学級におけるすべての児童に対する支援）

- ・自分らしさを認められる学級づくり
- ・Q－Uを生かした学級づくり
- ・児童が喜びを感じられる授業づくり

イ 第二次支援（小集団や個別での補助的支援）

- ・朝の時間を生かした指導
- ・加配教員を活用した指導
「習熟度別学習」「通級指導」「日本語指導」
- ・校内適応指導教室の設置
- ・「ことばのじかん」の位置づけ

ウ 第三次支援

- ・特別支援学級における指導

(3) 授業改善を目的とした校内研修の充実

ア 校内公開授業の実施（随時）

イ 公開授業研究会の実施（11月）

ウ 校内授業研究会の実施（11・1・7月）



公開授業研究会（外国語科の授業）

(4) 重点学校行事（運動会・宿泊学習・持久走大会）を生かした自尊感情の育成

- ・限られた条件の中での、児童の自尊感情の育成。

3 研究成果

(1) 教員の意識の変容

- ・常に「自尊感情の育成」という視点から教育活動を見直そうという意識の高まりがみられた。

(2) 児童の自尊感情の育成

- ・教員の意識の高まりが教育活動の充実につながり、その結果、6学年中5学年でQ－Uの「学級生活満足群」に属する児童の割合が増加した。

(3) コロナ禍での支援の充実

- ・コロナ禍であるからこそ、教育活動を見直し、支援の充実を図ることができた。

4 今後の課題

- ・コロナ禍の中で、家庭が抱える課題が大きく浮かび上がってきた。教育委員会や専門機関等と連携を図りながら支援方法を模索している。

学校経営研究＜04＞

研究主題 小規模校の特色ある学校づくり ～小中併設に向けての取り組みを通して～

学校名 日光市立足尾小学校

校長名 松浦 恵子

1 研究目的

本校は歴史が古く、昔は大規模校であったが現在は複式学級の小規模校である。令和4年度には小学校の校舎に中学校が併設されることが決定している。併設を見据えた上で、本校の特色を生かした学校経営を推進する。

2 研究内容

(1) 全校生での太鼓活動

朝の「いきいきタイム」に位置づけ、週一回の練習を地域ボランティアの指導で行っている。1～3年は「祭り太鼓」、4～6年は「銅（あかがね）の響き」という曲を練習し、運動会・地域高齢者とのふれあい交流事業・ボランティア感謝の会等で演奏している。



【運動会での演奏】 【地域とのふれあい事業】

(2) 地域教育協議会との連携

地域教育コーディネーターの協力により、生け花・お茶体験や地域探検の講師を依頼している。また、サマースクールやウインタースクールでのボランティアや持久走大会での沿道の安全の見守りなど幅広い連携を継続している。



【お茶体験】

【サマースクール・書道】

(3) 「ふるさと足尾」総合学習的な学習の推進

小学校単独として最後の今年は、創立148周年である。伝統ある小学校についての理解を深めてほしいという思いから、全校生での記念植樹を実施した。また、「足尾小検定」や「足尾こども検定」を作成し、タブレット端末を活用して実施する。また、今年は総合的な学習の時間に学校や足尾の歴史について、地域を探検したり卒業生にインタビューしたりして調べたことを8月の創立記念集会で発表した。記念の缶バッジを制作して配付した。



【松木溪谷での全校生での植樹と看板】

(4) 小中連携と併設に向けて

中学校の教員による小学校への乗り入れ授業の実施と小中合同運動会の実施、合同の研修会を実施して併設に向けての準備を進めている。日光市から「カリキュラムマネジメント」のパイロット校にも指定された。

3 研究成果

特色ある学校づくりを進める中で、より地域理解が進み、地域への誇りが芽生えてきた。また、中学校と密接な連携を図ることで、併設の準備を進めることができた。

4 今後の課題

特色ある活動を中学校との併設後もどのように継続していくかを検討する必要がある。

学校経営研究＜05＞

研究主題 認め合い・励まし合い・助け合う学級を基盤とした学校づくり
～小中一貫教育の推進を通して、地域とつながり社会に貢献できる子の育成を目指して～

学校名 下野市立石橋北小学校
校長名 青木 浩美 （令和2年度） 坂本 美保 （令和3年度）

1 研究目的

本地区で小中一貫教育（施設分離型）がスタートして5年目である。スクールガードボランティアによる見守り活動は16年継続され、地域や保護者の理解、協力のもと児童は落ち着いた学校生活を送っている。真面目で素直な児童だが、主体性や意欲にやや欠け、自己肯定感が低いなど、大規模な中学校への進学後に、「よさ」を発揮できていないのではないかという課題が見られた。石橋中学校区の目指す子ども像「地域とつながり社会に貢献できる子」、実践研究課題「居がいのある学級・学校づくりの推進、児童生徒の自己肯定感を高める」と重ね、本校ならではのめぐまれた環境のもと、全職員で全児童を育てるため、学級経営を基盤とし、さらに地域との連携を強化して取り組んでいく。そして創立40周年の節目の年に、これまでの歩みを振り返り、今後の展望を見定めたいと考えた。

2 研究内容

- (1) 小中一貫教育を踏まえた研究
 - ①とちぎっ子学習状況調査・全国学力学習状況調査（児童質問紙）の分析
 - ②学級力アンケートの実施及び分析
 - ③T・T及び教科担任の効果的な指導の研究
 - ④家庭と連携した取組
- (2) 地域との連携を踏まえた研究
 - ①創立40周年記念事業に向けた取組
 - ②学校支援ボランティア活動の工夫
 - ③学校評価（保護者アンケート）を生かした学校経営

3 研究成果

研究主題は、学校は、学級づくりが基盤であるという考え方である。そこで、学習状況調査から、①「クラスは発言しやすい雰囲気である」②「自分はクラスの人役にたっていると思う」の2項目、また学級力アンケート（公益財団法人理想教育財団）を考察した。

	① 4件法	② 4件法
R2	3. 1 1	2. 5 3
R3	3. 3 5 ↑	2. 7 3 ↑

年間3回実施した学級力アンケートでは、アンケート結果をもとにした話し合い活動（学級活動）を積み重ねたことで、話し合いの深まりや良い学級にしていくための主体的な取組が見られた。

	評価の高かった項目
低学年	なかよし あんしん ありがとう
中学年	なかま そんちょう なかなおり
高学年	仲間 認め合い 感謝 仲直り

低・中学年では10項目、高学年は15項目を個人アンケートで評価するが、いずれの学年においても、学級の温かさに通じる項目での評価が高く、また全学年同じキーワード「支え合い」も高評価であった。

家庭と連携した取組としては、「メディアコントロールウィーク（家庭学習強調週間）」「おうちであいさつ運動」を実施することで、学校での指導について理解していただき双方向での取組に努めた。

コロナ禍での40周年記念事業は、前年度から計画してきた大規模な行事を見送ることとなったが、児童による実行委員会を編制し、児童の発案を実現できるようにした。「日頃できない『記念碑』『記念像』を掃除したい。」など柔軟な意見に感心させられた。従来であれば来賓として式典に来校する方々に、代表児童がインタビューしまとめた映像を、各学級にICT機器を用いてプレゼンテーションしたが、地域の方々の学校への思いをしっかりと伝えようと取り組んでいた。児童のデザインによる「缶バッジ」は保護者実行委員が手作業で作製してくださった。全校児童は安全帽やランドセルにつけ、お世話になっているスクールガードボランティアなど、学校支援ボランティアの皆さんに贈り、喜んでいただくなど、記念事業は思い出深いものとなった。

4 今後の課題

研究計画では、卒業生（中学生）に小学校教育生活についてアンケートをし、意見を集めたかったが、できなかった。少し先にいる中学生が思うことは、小学校での指導に生かすことができると考える。今年度は実施したい。

学校経営研究＜06＞

研究主題 児童一人一人にとって明日が待たれる学校

～いじめを しない させない 見逃さないために～

学校名 佐野市立天明小学校

校長名 渋江 隆夫

1 研究目的

増加傾向にあるいじめを減らし、認知されたいじめを解消することで、児童は学校に来ることを楽しみにし、教職員は手立てを学び、やりがいを感じる

2 研究内容

(1) 職員研修

・栃木県総合教育センターの職員を招いて、「いじめ対応ハンドブック」を中心に問題行動未然防止プログラム研修を受けた。4 月当初の校内現職教育でも、児童指導主任を中心に内容を確認したが、児童の状況に合わせた指導等の必要もあり実施した。いじめについての認識を新たにすることができた。

(2) 授業研究

・「いじめ」を扱った学級活動（3 年）傍観者について考え、今後、自分がいじめの場面を見た時にどのような行動をするべきか宣言する活動を校内で授業公開した。

傍観者の立場を自分事として考えるだけでなく、これからの行動を促すことでいじめを抑制する効果や大人が初期の段階で認知し手立てを講ずることができるであろう。他の学年学級でも同様な内容で授業実践し、全児童が、傍観者もいじめをしているのと同じ、いじめをされた気持ちになって、自分ができることの宣言を書くことで今後の

いじめ防止につながると考えられる。

(3) アンケートの実施と対応

・定期的ないじめアンケートを実施し、記入内容に対してすぐに相談を実施し、該当児童への指導により早期解決への取組をしている。

・Q-U 検査に対しては、結果の分析をブロックごとに行い、さまざまな視点から学級全体や気になる子への関わり方を検討し、いじめにつながらないようにしている。

(4) 児童・保護者

人権週間に、児童と保護者に標語の作成を呼びかけた。提出された 100 件の作品を校内に掲示し、人権を大切にする意識の高揚を考えた。

各クラスで、一人一人を大切にする標語を作成し、発表したことで、クラスとしての意識の高まりがみられた。

3 研究成果

外部から指導者を招くことで大切なことを再認識したり、気づかなかったことをどう生かすか考えるきっかけにもできた。

教職員の研修と児童・保護者の活動と関連させながら目的にせまることができた。

4 今後の課題

いつでもどこでも起こりうることを忘れずに、児童や保護者の声に耳を傾け、担任一人でなく学年やブロック、学校全体で解決していく姿勢をもち続けなければいけない。

学校経営研究＜07＞

研究主題 with コロナ時代における学校経営の在り方

～持続可能な感染拡大防止策の工夫と生徒・職員の衛生意識の変容把握から～

学校名 宇都宮市立晃陽中学校

校長名 校長 加藤 悦宏

1 研究目的

校内で持続可能な新型コロナウイルス感染拡大防止策の工夫改善を進めることと並行し、生徒や職員の衛生意識の変容把握の調査を行い、これらの成果や結果の分析等を通して、今後も続くであろう with コロナ時代における学校経営の在り方について考察する。

2 研究内容

研究を「a ものづくり系列」と「b 調査及び指導系列」の二つの内容で進める。

a 1 : パーティションの製作と設置

中学校には技能系教科の特別教室があるため、授業を実施するために飛沫拡散防止のパーティションが必要になった。そこで、できるだけ安価で簡単なパーティション※¹を考案及び製作し、技術室と家庭科室に設置した。



※1 技術室のパーティション

a 2 : 足踏み式消毒液スタンドの製作と運用

教室に入る際に生徒に使用させていた消毒液の入ったポンプ式のボトルは、同じ箇所を大勢の手が触れるため、足踏み式の消毒液スタンドを考案・設計し製作することにした。試作した消毒液スタンドは、2×4材を支柱とした。

しかし、ペダルが踏みづらく、早々に改良し、正面玄関入口に設置した※²。

次に、量産を目指してパーティションの材料であるSPF1×4材を用い小型のver.3※³を製作した。各普通教室の入口及び保健室、図書室に設置した。

地区市民センターには、手でも使いやすいレバーを付けたものを寄贈した。製作は、特別支援学級の生徒と共に行い、計100台を越えた。



※2 スタンドver.2



※3 スタンドver.03

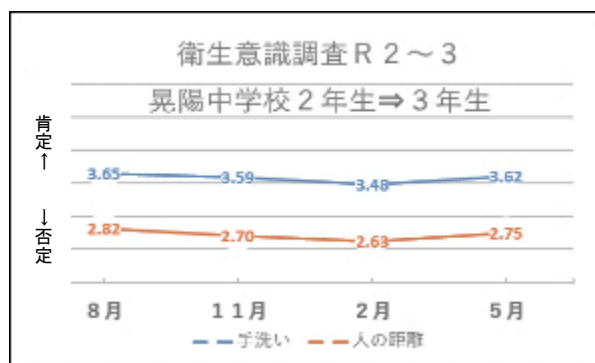
b 1 : 衛生意識調査のアンケート調査

本校では、いじめや日常の不安等の早期発見・解消のために生活アンケートを定期的に行っている。今回、そこに生徒の衛生意識を調べるために「手をよく洗わない人のことをどう思いますか?」、「距離を取らずに平気で近づいてくる人のことをどう思いますか?」の2問を加え8月、11月、2月に実施した。

8月末の1回目のアンケートでは、「手洗い」の意識が高く、「ソーシャルディスタンス」の意識が低いことが分かった※¹。

なお、平均値も低い分散も大きく、困っていると感じている生徒もいることが分かった。職員の評価（見取り）も同様であり、「ソーシャルディスタンスの確保」に課題がある

ことを確認・共有することができた。



☆1 表 生徒意識調査 結果の推移 (4件法)

生徒の「手洗い」の意識が高かったのは、学校再開当初から、登校してから手を洗い、消毒をしてから教室に入るといふ、生活の流れを決めて全校生徒に一斉に指導したことや養護教諭と保健委員会で製作した手洗いの仕方のビデオ上映、そして消毒液台の活用等、様々な実践の成果と考えられる。



※4 委員会制作ポスター

課題であるソーシャルディスタンスの確保に対する意識を高めるために、先生方による指導の強化、各委員会活動での啓発の工夫等※4を行い、実践した。

しかし、2回目以降の調査では2つの項目が共に下がっており、世の中で第2波や第3波が起きてしまったことを説明

できる結果になってしまったと言える。

b 2 : これまでの実践の整理

研究開始以前のコロナ対応については、国や県、市からの日々更新されるガイドラインに従い、それぞれの校務分掌で分担して学校再開に備えたり、再開後の指導に当たったり

した。本研究を機に、校内掲示板システムを活用してこれまでの実践の集約・整理をした。

3 研究成果

a 1 : パーティションの製作と設置

これにより、授業中、生徒同士が安心して顔を見ながら活動することができていた。また、製作及び設置したことにより、先生方の課題に対する取組み姿勢を生徒に示すことにもつながった。

a 2 : 足踏み式消毒液スタンドの製作と運用

足踏み式消毒液スタンドをより安価(400円程度の材料代)で、量産することができるようになった。そのため各所に設置することで、日常的に生徒が使用でき、消毒用アルコールの消費量も増えた。また、地区内の小学校及び市民センターの職員や利用者にもとても好評で、製作に当たった特別支援学級在籍生徒4名の技能のほかに自己有用感も大いに高まった。

(1/9 下野新聞, 6/23 読売新聞に掲載)

b 1 : 衛生意識調査のアンケート調査

アンケート調査の結果は、11月にかけて衛生意識が低くなった。このことは、第2・第3波が起きた社会の状況を裏付ける結果と言える。

教師側の地道な指導や委員会等の啓発など、指導の工夫が更に必要であることが分かった。

4 今後の課題

本研究のa **ものづくり**系列では、メンテナンスを今後どのように行うか検討していく。

b **1 生徒アンケート**では、社会の状況に左右されない生徒の衛生意識の定着のために、その指導内容や方法については、今後も課題として一層工夫していく。

b **2 これまでの実践の整理**では、実践内容の集約・整理は出来たが、今後は担当者が変更する際に引継ぎが適切にできるか検証していく必要がある。

学校経営研究＜08＞

研究主題 「心の教育の充実」～ローテーション道德授業の実践を通して～

学校名 那須町立那須中央中学校

校長名 渡邊康成

1 研究目的

- (1) 同じ教材を別のクラスで何度か実践すること、道徳科の授業力を高める。
- (2) 授業を担当しない教師は授業を参観できるため、お互いの研修の場とする。
- (3) 担任以外の学年スタッフも授業を担当することで、生徒に多様な学ぶ機会を提供する。

2 研究内容

学校経営の柱の一つである「心の教育の充実」に取り組んでいくために大きく2つの点について重点的に取り組んできました。1つ目は「道徳科の授業の充実及び道德教育を意識した教育活動の推進」であり、2つ目は「実践を踏まえた特別の教科『道徳』の指導計画の改善・充実」でした。この2点について「ローテーション道德授業の実践」を通して得られた成果や課題を、改めて検証してみました。

- (1) 「ローテーション道德」の導入
- (2) 「道徳科の授業の充実」について
- (3) 「指導計画の改善・充実」について
- (4) 「評価」について

「評価」については、評価名簿に授業担当者が2～4人程度目立った生徒を抽出して学習の様子を書き込むようにしました。毎週の学年会で内容を確認し、道徳の授業で育てようとしている道徳的な気持ち、日々の生活で生徒に培われているのか、どのような観点で見取っていくのか研究を続けているところです。

3 研究成果

今年度の取り組みを通して、先生方からは「同じ授業を繰り返すため、授業の流れをアレンジできた。1回目よりも2回目、3回目の授業が良くなっ

ている。同じ内容項目で3回実践できたため、生徒の表情を見ながらその変容を見ることができ、授業改善につながった。それが授業力の向上につながったと感じている。」という話がありました。生徒からは、「道徳の授業で一人ひとり必ず自分の意見を発表する場面では、自分の意見がおかしいと思われるのではないかと少し怖かったですが、一人ひとり違う意見があるのは、顔・性格が違いうように当たり前だと思い自信を持つことができました。そして冷やかしたりせず、しっかり拍手してくれる友達ばかりで本当に嬉しく思いました。道徳は心の授業と言われていますが、本当にその通りだと思いました。自分が優しくなるためのチャンスだと思い、しっかり授業を受けようと思いました。」という意見が振り返りアンケートで書かれていました。道德授業が「考えを深める生徒の育成」に向かっていることを感じます。「自分の考えを相手に伝えたり、自分と異なる考え方を受け入れたりする姿勢」が、学校全体で育まれつつあることは大きな研究の成果だと思います。

4 今後の課題

道德教育は、生徒のよりよく生きたいと願う内的な力を信じ、自らの生き方をより輝かせ、活力のあるものとするために不可欠なものです。道徳科の授業については、多くの改善点も指摘されている中で、生徒の発達の段階を前提としながら、個人差にも着目して指導内容、指導方法を適切に決定し、実施していくことが求められています。道德教育推進教師一人が役割を果たすのではなく、すべての教師が協力体制で指導を進めていく上でもさらにローテーション道德を進めていきます。

戻る

学校経営研究＜09＞

研究主題 「県南の雄・栃高」～グランドデザインづくりによる、学校ビジョン・ミッション共有と学校組織の活性化～

学校名 栃木県立栃木高等学校

学校長 大川 直邦

1 研究目的

「栃高グランドデザイン」づくりをとおして、教職員が「県南の雄・栃高」としてのミッションを共有し、組織的に生徒を育成する「活力ある集団づくり」の実践研究を行う。

2 研究内容

本校では、時代を切り拓くリーダー育成のため、学力向上と納得のいく進路実現を目指している。しかし、生徒・職員の尽力にも関わらず、進路実績に対する危機感が高まっていた。県教委からの「学力向上に向けた指導體制モデル事業（令和2～4年度）」指定を契機に、本校教育活動の総点検を行い、令和4年度新課程への円滑な移行に向けて、第10期中教審での審議内容を踏まえた「グランドデザイン」づくりを行うこととした。

（1）研究体制・組織づくり

既存組織を活用し、検討委員会及びWGを設置した。WGは、意図的に主幹教諭及び中堅教員によって組織し実働を担うこととした。グランドデザインづくりの意味・目的を共有の後、主体的かつ自覚ある活動を行った。主な活動は、①KJ法等による現状把握、目指す姿の共有、②先進校視察及び報告（本校との比較）、③外部専門機関を活用した学力把握・分析及指導改善（PDCAサイクル）、④分掌組織との連携（学年、進路、学習、教科、SSH等）等

（2）国の動きや県教委指定事業との連動

第10期中教審の審議情報等の提供・解説や

県指定事業の活用（進路指導体制支援、ICT環境整備・活用、授業改善）、新教育課程づくりと観点別評価制度研究、進学型単位制の導入準備とともに、多彩な職員研修（面接・小論文指導、授業改善、観点別評価等）を実施した。

3 研究成果



栃高グランドデザイン(表：ポンチ絵)

「栃高グランドデザイン」づくりによって、全職員が教育実践等を振り返ることとなり、その結果、「時代を切り拓くリーダーの育成」（スクール・ミッション）の再定義を行い、「栃高らしい令和の日本型教育の構築」に向けて、3スクール・ポリシー（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、グラデュエーション・ポリシー（栃高GP））を策定した。特に、栃高GP策定では、新教育課程実施及び進学型単位制導入を視野に、観点別学習評価の3観点を踏まえた「育成したい8つの資質・能力（栃高GP）」を策定した。その後、生徒、保護者、同窓会、学校評議員に意見を求め完成させ、成果物を広く公表することができた。WGを核とする段階的かつ組織的対応によって、活力ある集団づくりを推進することができた。

4 今後の課題

観点別評価への反映に向け研究を継続する。